

特集：卵子学会の歩み

## 卵子談話会の頃の思い出 Memories for ‘Ranshi-danwakai’, the earliest meetings on the mammalian ova research

豊田 裕

Yutaka Toyoda

帯広畜産大学名誉教授 〒080-8790 帯広市

*Professor Emeritus, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine,  
Nishi 2 sen-13, Inada-cho, Obihiro, Hokkaido 080-8790, Japan*

### はじめに

今日の日本卵子学会が1960年(昭和35年)に、わずか数名で出発した哺乳動物卵子談話会にまで遡ることができることは、学会のホームページにも記載されていて、周知のこととは思いますが、ここでは、筆者自身の限られた経験に基づいて往時を振り返り、将来への糧としたい。

### 卵子談話会との出会い

当時の記録より、最初の第7回までの演者の所属を、独断により農学系と医学系に大別して示せば、表1の如くであり、当初から両分野の交流の場であったことがうかがわれる。

筆者が最初に出席したのは、第3回(1962)の会合で、まず会場の優雅さに驚かされた。その前の年から参加されていた東邦大学医学部の林基之教授一門のお世話であったらしいが、大学院を出たばかりの貧乏書生には、高輪プリンスホテルの豪華な一室は、まさに別世界の感があった(ただし、このような優雅なサロン風の会合はこの年限りだった)。

次に印象的だったのは、第7回(1966)の会合で、3人の新分野の参加者を得て、極めてユニークな談話会であった。佐藤晶子先生(苫小牧駒沢短大)が、「日本には、こんなに珍しい会合があるのよ」と、柳町隆造先生(北大教養)を誘って参加されたように記憶している。柳町隆造先生は、当時、米国のウースター実験生物学研究所(WFEB)のチャン先生(Dr. M. C. Chang)の下で、ハムスター卵子の体外受精に成功し、世界を驚かせていたが、一時、母校に帰国して教鞭を取っていて、この年にハワイ大学医学部に異動される途上

であった。演題の「経口的に与えたエチニール・エストラジオールのマウス卵子に及ぼす影響」は、当時の世界的な研究課題であった経口避妊薬開発のための基礎研究の一端を紹介されたように思う。

もうお一人は、山根基信先生である。哺乳動物卵子研究の世界的パイオニアである先生は、すでに現役を退いておられたが、少しも偉ぶるところなく、若き日のドイツ留学で取り組まれた「初期卵子試験技術の追想」を淡々と話された。極めて貴重な興味深い内容であった。

### 卵子談話会における研究発表

最初の数年間は、もっぱら聞き役に専念していた筆者が、初めて自分の仕事を発表したのは、第11回(1970)の会合であった。演題は「マウス卵子の体外受精」であった。その後の研究室からの発表は表2に示すごとくであり、ほぼ毎年のように発表が行われてきた。それは若手の教員あるいは大学院生にとって「腕試し」の機会でもあった。研究テーマも卵子の体外受精から卵子の培養、凍結保存など多岐にわたり、対象動物もマウス、ラットから野生動物および家畜へと広がりを見せていった。忌憚のない意見が飛び交う談話会は、若手研究者にとって絶好の鍛錬の場であった。

### おわりに

発足以来、半世紀以上を経過した本学会が、「お互いに意見、技術交換、文献紹介などをしながら、卵子研究を推進して行こう」という当初の理念を保持していることは、喜ばしい限りである。とくに、医学系と農学系の研究者が均衡を保ちながら交代で会を運営している姿は、他に類を見ないように思われる。これも元をたどれば、卵子の持つ限りない魅力に由来すると考えることもできる。本学会が、活発な議論を通して若い人たちの研鑽の場であり続けてほしいと願うものである。

(受付 2018年10月31日/受理 2018年11月3日)

別刷請求先：〒080-8790 北海道帯広市稲田町西2線13番地  
帯広畜産大学原虫病研究センター

e-mail: toyodayu3@ozzio.jp

表1 初期の哺乳動物卵子談話会における出席者数, 演題数および演者の所属

回	出席者数	演題数	演者の所属			会場	開催日
			農学系	医学系	その他		
1	9	4	4	0	0	獣医師会館	1960. 5. 9
2	15	6	4	2	0	ハムソーセージ会館	1961. 4. 13
3	22	7	4	3	0	高輪プリンスホテル	1962. 4. 9
4	20	7	5	2	0	獣医師会館	1963. 4. 10
5	25	3	1	2	0	ハムソーセージ会館	1964. 4. 8
6	30	5	3	2	0	ハムソーセージ会館	1965. 4. 5
7	25	6	2	1	3*	ハムソーセージ会館	1966. 4. 8

(注) \*佐藤晶子(苫小牧駒沢短大), 柳町隆造(北大教養), 山根甚信.

表2 卵子談話会における研究発表

回	年	発表者	演題
11	1970	豊田 裕・横山峯介	マウス卵子の体外受精
12	1971	福田芳紹・豊田 裕	ラットの排卵および受精に及ぼすエタノール経口投与の影響
		横山峯介・豊田 裕	体外におけるマウス精子の受精能獲得について
		福田芳紹・豊田 裕	体外におけるマウス卵子の受精能力保持時間の検討
13	1972	岡田 修・福田芳紹・豊田 裕	裸化マウス卵子の体外受精について
		横山峯介・豊田 裕	マウス体外受精に及ぼす血清アルブミンの効果
14	1973	岡田 修	マウスの体外受精における培養液量の意義
		豊田 裕	ラット卵子の体外受精
15	1974	岡本正則・岡田 修・豊田 裕	マウスの体外受精におけるグルコースとピルビン酸の効果
16	1975	福田芳紹・豊田 裕	制限給餌下で排卵されたマウス卵子の受精能
		豊田 裕・岡本正則	マウスの体外受精法に関する一つの試み
17	1976	東 善行・岡本正則・豊田 裕	マウス卵子への精子侵入に及ぼす卵丘細胞層の影響
		笠井健吉・福田芳紹・豊田 裕	アンプル法によるマウスの体外受精卵の培養について
18	1977	湊 芳明・笠井健吉・豊田 裕	誘発排卵マウス胚の培養成績について
20	1979	本村昌次・豊田 裕	走査電顕によるマウスの体外受精初期過程の観察
		中瀧直己・豊田 裕	自然排卵および誘起排卵由来マウス2細胞期胚の凍結保存
21	1980	本村昌次・柴田徳美・田島淳史・湊 芳明・豊田 裕	走査電子顕微鏡による豚卵子透明帯の観察
22	1981	豊田 裕・湊 芳明・板垣佳明・星 雅樹	Ionophore A23187で処理された精子による豚卵子の体外受精について
		福田芳紹・高杉 真・豊田 裕	穿刺によるハムスター卵とマウス卵の活性化誘起について
23	1982	豊田 裕・大井善巨	ナキウサギ ( <i>Ochotona rufescens</i> ) の卵子に関する2, 3の観察
24	1983	福田芳紹・大滝眞子・豊田 裕	ハムスター体外受精卵の2細胞期への発生について

## 文 献

1) 第20回哺乳動物卵子談話会—20周年記念シンポジウム—, 1979.

2) 大槻清彦 (1984) : 哺乳動物卵子談話会の歩み. 哺乳動物卵子研究会誌, 1(1): 1-6.